真宗伝道に関する一考察

――文化的自己観に基づく理論的枠組み――

長岡岳澄

1　目的と問題

本論の目的は、文化的自己観に基づき、真宗的宗教性を把握するための理論的枠組みを設定することにある。

このような目的設定の背景としては、以下のような問題が挙げられる。

従来、真宗伝道に関する研究を進めようとしており、そのためには実際に真宗を取り巻くことがら・現象を把握・理解していく必要があると考えている。その一環として拙論「二種深信の臨床的研究―二種深信と自我同一性の関係―」において、教学上、真宗信仰を表わすとされる二種深信が実際にどのように受けとめられているかということを、二種深信においていわれる二種一具という面と心理学において示される自我同一性の概念との相関に注目して研究を行った。その結果、二種深信においていわれる二種一具については、その法の深信と機の深信との正の相関が証明されたものの、二種深信と自我同一性の相関については設定した仮説に反して無相関であった。また、二種一具の受けとめに関しても、従来の一つの信心の両面を表わしたものであるというような一義的なものではなく、各々の受け止めがあり、多様で曖昧であることが示された。

このような二種深信の受け止め方から、実際の真宗的宗教性とは多様で曖昧なものであることが推測されるのであるが、現状においてはその多様さと曖昧さをどのように把握できるかということが明らかとはなっていない。

そこで、本論においては、まず、現場における真宗的宗教性が一義的なものではなく、多様で曖昧であることの理論的根拠を宗教性の多元的理解という考え方に求め、更に、その多元的理解に大きく影響を及ぼしていると考えられる文化的自己観について言及し、そのうえで現在の真宗的宗教性を把握するための理論的枠組みを設定することとする。

なお、本発表における真宗的宗教性とは研究の射程から日

本における真宗的宗教性に限ることとする。

2　先行研究の概観

2―1宗教性の多元的理解に関する先行研究

宗教性の多元的理解とは、従来宗教性の複雑さに由来するものである。かつて宗教的であるかどうかを客観的に理解しようとする際に、教会への出席率等の行為がその尺度として用いられていたが、宗教性というものは必ずしもそのような行為によってのみ測定できるものではなく、また世界の諸宗教を単一の尺度によって比較することはできない、ということから、この宗教性の多元的理解という視点が生じてきたものであると考えられる。

そして、このような視点からの宗教性理解の嚆矢としてグロックとスタークの多元的理解が挙げられ、経験的次元、イデオロギー的次元、儀礼的次元、知的次元、結果的次元という五つの次元が提示された。

このような宗教性の多元的理解という視点を受けて金児[1]は真宗寺院の住職と門信徒代表に対して質問紙調査を行っており、このなか、宗教行動と宗教意識についての分析が行われている。

そして、質問項目への回答を分析し、宗教行動については「心の宗教―物の宗教」と「此岸―彼岸」という二つの軸で説明し、門信徒代表の宗教行動を類型化している。

宗教意識に関しては、因子分析によって「民俗宗教性」「真宗信仰性」「宗教的実践性」「保守性」「事なかれ主義」という五つの因子を抽出し、真宗的宗教性はこれらの因子が関連して形成されているということ、門徒代表はもちろん、真宗寺院の住職においても「民俗宗教性」が存在するということが明らかにされている。そして、このなか、特に宗教性に直接関係があるものとして「民俗宗教性」と「真宗信仰性」が挙げられ、これは宗教行動における「心の宗教―物の宗教」軸に対応するものであるとされている。

金児氏はさらに日本人における宗教観へと論考を深め、そこに向宗教性、加護観念、霊魂観念の三つの宗教観を見いだしている。

このように金児の実証的データに基づいた研究から、日本人における真宗的宗教性及び宗教性の実態が明らかにされており、本論との関連においては、特に真宗における宗教意識として「真宗信仰性」「民俗宗教性」という因子が存在していることが明らかにされている点が重要であると考えられる。なぜならば、このことは実際の真宗的宗教性というものが一義的なものではなく多元的なものであることを証明しており、また、その理解には多元的視点が必要であるということの根拠となると考えられるからである。

そして、金児は日本人の宗教観として先に挙げた向宗教性、霊魂観念、加護観念について、それは日本人の対人関係観と密接に関係していることを指摘し、さらに調査によって証明しているのであるが、日本人の自己意識そのものについては言及されていない。

しかし、真宗的宗教観の把握にはその基底となる日本人の自己意識についての理解が必要であると考えられるために、本論においては日本人の自己観についての先行研究を見ていくこととする。

2―2日本人の自己観に関する先行研究

「日本人」に関する論考としてはアメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトによる『菊と刀』をはじめ、様々な理論が構築されてきているが、このなか、日本人と西欧人とでは自己の構造や内容が異なるという比較文化的理論の流れを受けて、近年、北山[2]、高田[3]らによって、西欧における「相互独立的自己観」と日本における「相互協調的自己観」という二つの自己観が提示されている。

北山は、従来の心理学の研究成果から、心理学の理論や方法を考えるためには、そこにある文化的背景を考慮する必要があるとしている。これは従来の研究は、「心」というものは人類に普遍的なものであるという理論的前提に立ったうえで進められていたが、自己高揚に関する研究等から、その結果が文化によって大きく異なるということがあり、そこから「心」のプロセスそのものが様々な文化や民族によって異なる可能性があるとしている。

そして、「心」は文化に関与することを通じて形成され、同時に、文化は多くのそのような「心」の社会的・集合的活動により維持・変容されることにより受け継がれていくという心と文化の相互構成過程に注目する文化心理学を提唱している。この文化に関与することを通じて形成される人の主体の性質について通念を「文化的自己観」とし、この文化的自己観として、西欧文化において優勢な「相互独立的自己観」と日本文化などで優勢な「相互協調的自己観」を提唱している。

相互独立的自己観とは、自己は他者や回りのものごとから区別され、切り離された実体であるとされ、自己は周囲の状況とは独立にある主体の持つ能力、才能といった様々な属性によって定義されるとし、相互協調的自己観とは、自己は他者や回りのものごとと結びついて高次の社会的ユニットの構成要素となる関係志向的実体であるとされ、自己の定義は人間関係そのもの、あるいはそこにある関係性の中で意味づけられている自己の属性が中心になるとしている。

この二つの自己観について高田は、人間存在は個性的側面と社会的側面をもち、自己にもそれに応じた二つの側面があるという視点から、相互独立的自己観は個性的存在としての

人間、相互協調的自己観は社会的存在としての人間を強調しているとする。そして、このように考えるならば、二つの自己観は所属する文化に関わらず如何なる個人においても双方の自己観に即した考え方をもち、その優勢度によって個人差が生じるとしている。

この視点によれば、二つの自己観は別次元に位置していると考えられ、このことから高田は二つの自己観を別々に測定する文化的自己観尺度を作成し、調査に基づいてこのことが確認されている。

そして、この結果から、日本においては他の文化圏よりも相互協調性が高く、相互独立性が低いことが確認されている。

3　理論的枠組みの設定

以上の二つの宗教性と二つの自己観という理論的枠組みに基づいて、本論の目的である日本における真宗的宗教性を把握するための理論的枠組みを以下において設定していく。

まず、北山、高田の理論的枠組みから日本文化における自己観としては相互協調的自己観が相互独立的自己観に比べて優勢であることが確認され、また、高田の理論的枠組みから、この二つの自己観は同次元における強弱ではなく、別次元にあるものであることが実証的に確認されている。このことから、日本的自己観はこの二つの自己観から成り立つ構造を持つものであると考えられる。

また、金児の理論的枠組みから、真宗的宗教性において五つの因子が確認され、このなか、特に「民俗宗教性」と「真宗信仰性」が宗教性と直接関係しているものであるとされる。このことから真宗的宗教性においてはこの二つの宗教性から成り立つ構造を持つものであると考えられる。

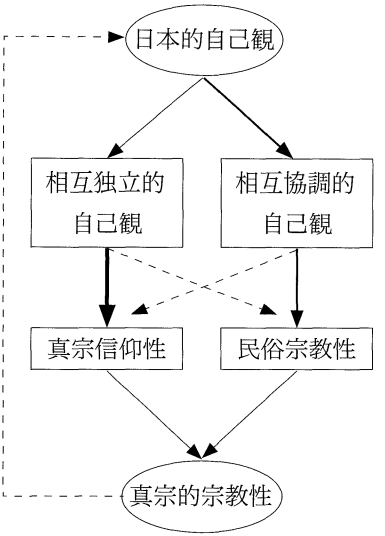
この日本的自己観と真宗的宗教性との関係は、北山の相互構成過程によれば文化と「心」は互いに影響を与えながら成立していると考えられ、そうであるならば、日本的自己観と真宗的宗教性は相互に影響を与えて構成されていると考えられるのであるが、より簡略に考えるならば、日本的自己観が基底にあり、その上に真宗的宗教性が成立しているものであると考えられる。

更に、日本的自己観における二つの自己観と真宗的宗教性における二つの宗教性との関係においては、相互協調的自己観は民俗宗教性と、相互独立的自己観は真宗信仰性と関係しているのと考えられる。

なぜならば、民俗宗教性とは、素朴な信仰に根ざし、民衆を主たる担い手として展開する宗教性を表わしたものであると考えられるのであるが、金児がこの民俗宗教性は日本人の対人関係観、特に他者への信頼を前提とした依存、あるいは期待を基盤としていると指摘しているように、対人関係観と

深く関わっていると考えられる。そして、対人関係において自己を位置づけようとする自己観が相互協調的自己観であるので、この間には強い因果関係があるものと考えられるのである。

一方、真宗信仰性とは、真宗における宗教的信念・経験・知識・実践を含むものであり、真宗門信徒において期待される宗教性を表わすものである。これは周囲の状況とは関係なく、主体的な各自の信仰体系の確立と深く関わるものであると考えられる。そして、周囲の状況とは独立にある主体の持つ能力・才能といった様々な属性によって自己を意味づける自己観が相互独立的自己観であるので、この間にも因果関係があるものと考えられる。



図―1　日本的自己観における真宗的宗教性

このことから、日本的自己観における真宗的宗教性においては、まず図―1のような構造があるものと考えられ、これが日本的自己における真宗的宗教性を把握するための理論的枠組みとして設定される。

4　今後の方向

以上、日本的自己における真宗的宗教性を把握するための理論的枠組みを、相互協調的自己観と民俗宗教性、相互独立的自己観と真宗信仰性との因果関係において設定したのであるが、今後はこの仮説を実証的に検証していくことが課題となる。

具体的には金児の宗教行動・宗教意識に関する項目群と高田による　文化的自己観尺度を参考にしたうえで質問紙を作成し、それぞれの関連性を分析していくことになる。

そして、このような分析を通して具体的な真宗的宗教性を把握することにより、真宗伝道の具体的方法が見えてくるものであると考えられる。

1　金児暁嗣『日本人の宗教性―オカゲとタタリの社会心理学―』1997　新曜社
2　北山忍『自己と感情―文化心理学による問いかけ―』1998　共立出版株式会社

3　高田利武　「日本人らしさ」の発達社会心理学　2004　ナカニシヤ出版

〈キーワード〉　真宗、伝道、文化的自己観

（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター）

新刊紹介

三枝　充悳

『三枝充悳著作集』全八巻

第一巻　仏教概説　定価一三、〇〇〇円
第二巻　初期仏教の思想　定価一九、〇〇〇円
第三巻　バウッダ　定価一三、〇〇〇円
第四巻　縁起の思想　定価一三、〇〇〇円
第五巻　龍樹　定価一三、〇〇〇円
第六巻　仏教の宗教観・人間観　定価一三、〇〇〇円
第七巻　比較思想論Ⅰ　定価一三、〇〇〇円
第八巻　比較思想論Ⅰ　定価一三、〇〇〇円

A五版・法蔵館・二〇〇四年～二〇〇五年

to Seshin 世親 (Vasubandu) and from *shujō* 衆生 to *ujō* 有情 (sattva).

In addition he used new terms, *tōshōgaku* 等正覺 and *mujōgaku* 無上覺, for the first time at the age of eighty-five. These rewritings are due to the fact that he was facing difficult problems such as strife with his son Zenran and opposition to the Nembutsu.

So he increased his focus on Mappō consciousness, and used new terms in his last year.

Ujō signifies that all beings strive to live always to the utmost. On this account Shinran thought *ujō* better than *shujō*.

In the history of Chinese translations of Buddhist scriptures, the term *shujō* is older than *ujō*. Shinran used the new term *ujō* consciously rather than the older *shujō*.

135. A Consideration Concerning the Propagation of Shin-Buddhism: a theory based on the cultural view on self

Gakuchō NAGAOKA

In Shin-Buddhism, there have been two religious aspects: one is the pure religious aspect expected of Shin-Buddhists and the other is the folk aspect including worldly profits and ancestor worship. These two aspects are said to comprise the religiousness of Shin-Buddhism. As for self in Shin-Buddhism, it is assumed to consist of a mutually independent self and a cooperative self.

Taking into consideration the two religious aspects and the two types of view of self mentioned above, I try to advocate a new theory about the propagation of Shin-Buddhism.

136. The Construction of *Tannishō*, Chapter II

Kakuji SASAKI

This paper is about different perspectives on understanding the truth or the Primal Vow in chapter two of the *Tannishō*. According to the common